

大阪は何を学ぶに適するか

長岡半太郎

支那歴史を通覧して奇怪に堪えぬ事実がある。支那が北夷に征服せられたのは数回である。征服者が風俗、習慣、文芸等においてその征服した人民を同化するのが順当であるが、支那はこれに反し、征服した人種を逆に同化している。是は結局支那の文化の程度が、征服者より高尚であつたからであらう。両者間の相互關係は頗る微妙であるが、これに類したことが大阪でも窺われる。夏の陣で豊臣氏が亡びた後は、その恩徳に浴した大阪の市民を離散せしめて、日本貿易に関する特殊権利を衰滅に導くが、徳川氏の政略であつたかと考えらるるけれども、利に敏い大阪人は幕府から来た人を同化して、その本能を發揮し、徳川時代においても関西貿易を一手に引受けていたことは明白である。維新後に至つては益々その傾向を逞うし、他府県から大阪に入りたる者の数は夥多おびただしくあるけれども、二三年大阪に居住すれば、自らその氣風に浸染し、同化作用を受くるは歴然としてゐる。これに均ひとしく大阪人が他郷から移つた人の氣風を受けて、土地の弊害を一掃した形跡もまた歴然たるものがある。

春の日に大阪郊外に遊べば、菜種の花が一望涯りなく咲き揃つてゐるに目を驚かされる。世界に存在する九十二元素の中で、この花と同じ色であるものは、只黄金一つである。この元素の効力は、古今を問わず、人類の最も懂れたものである。日本では大阪人がこれを得るに最も巧妙であつた。今日でも最も巧妙である。

若しや四囲の田畑を飾る菜種の花弁が一つ一つ黄金化したならばとは、初夢にでも見そうなことである。昔は番頭小僧は、算盤そろばんを枕にして眠り、朝起きたときの初めの挨拶は、何かぼろい儲けはおまへんかなと言つたそうだが、

其想は今日となつても一向變るまい。一層向上しているかも知れない。一攫千金に成功して、数ヶ月に鉅萬の富を重ねても亦数ヶ月して身代を屠られ、マイナスの地獄に墜落するの憂目に逢うことを覚悟せねばならぬ。こんな事は釈迦に説法、各自の、方寸に存する。兵は詭道なり、商も亦詭道なり。孫呉の略を算盤上より割出し、勝を千里の外に決せんとする大阪人の氣象は益々旺勢となり、日本全国の都市を風靡せんとしている。殊に近年工業の発達は目覚しく、商を兵に例うれば、工は武器に相当する。新鋭の軍器を推し立てて兵を進め、向うところ敵無き有様になつて来た。彼の世界綿業の中心であつたランカシアは、すでに悲鳴をあげ、和協の申込みをなしつつあるに鑑みれば、我商業が如何に鋭利なる武器を以て堅実に進行しつつあるかを想像せしむる。然してこの勢いは全国の製造者が与つて力ある結果であるけれども、他市の事業は多く範を大阪に採つたためであるから、大阪の同化力は単にここに移住した人に及ぼしたばかりではない。冥々の裏に日本全体に伝播し、行く行く世界を股に懸け、メード・イン・ジャパンの旗幟を人類に普及せんとしつつある首途である。

機至つてこれに乗ぜざれば反つてその咎を受くることは論を待たない。今日世界が不景氣に悩まされて、欧米では幾百萬の失業者を出せるに對し、我邦は非常時の看板を懸けながら、自若としているのは僥倖に相違ないが、畢竟商工業の發達意外に、速くも自給自足の機運を養成し、進んで邦品を外国市場に出し、他国の製品を漸次駆逐し得る情勢を構成し得たからである。この機乗ずべくして失うべからずとは、誰も異存がない。即ち製造品を精巧低廉にして、他国のそれを凌駕する策を講ずる方便は、偏に教育の力に頼らなければならぬ。

わが邦では数年来工学が研究的に漸次進捗し、今日の状況を誘致した事實は皆首肯するところである。十年前までは外国の模倣のみに努力したのである、その方が力を勞せず、間違いも少いから、その方針を続けて来た。今日なおその流儀を行っている老技師は沢山ある。然し外国の製造方法が最善であるとは言えない。氣候の関係、用途の差違、材料の選択供給、その他の点を逐一考慮に入らば、必ずしもこれまでベストを尽くしたとは断言し難い。

設計に至つても、精細に調べれば、外国以上に良好なるものが案出される。また外国にない品物でも、攻究すれば人類の福祉を増大すべきものがある。即ち研究すればいよいよ妙案に逢着するのであるから、伝え来つた模倣主義を放棄して、独特の考案に信頼するが得策であり、また個人としても勇らしくあることを痛感して来たものである。此の如き精神からスタートして、工業を發展するが合理的な方法であるは、別に議論の余地がない。然し工業研究は頗る困難が伴っている。単に実験室の小仕掛けな試験に信頼するのは危険である。必ず製造所につき、その可能性を確かめねばならない。大仕掛けに実行してみれば、意外な欠点を生ずることが間々あるから、実験室の結果のみでは十分信用を措き難い、それゆえ工業教育を遺憾なく發揮することは、大阪の如き百般の工業が手近に代表されてあるところが最も適応する場所である。世の中には、昔の漢学者流の議論をなす人が往々ある。閑静な町で沈黙考して研究するが必要であるから、大阪のようなところは不都合であると論ずる人もあろうが、工学方面では全く別である。製造所と連繫していることが必要である。製造品の集散を目前で詳にすることも必要である。殊に価格の問題は進展上委しく弁えておらねばならない。商と工との学問を為し、実行的に活動し得る人を養成するに適応する土地は、他に求めて得べからずと考うるのである。

大正十二年関東大震の火災で、東京横浜では数十年の蓄財を灰燼となしたので、外人は日本人は疲弊困憊再び起つことが不可能であろうと考えたところから十年を経ざる間に、米人が日本製の電球を点し、欧人が日本製の綿布を纏うに至つたのは、何たる認識不足であろう。日本人も人絹の製造が発達すれば本絹が売れなくなつて貿易の平衡を失うと杞憂を抱いたものがあつた。しかし今日は外国におけるよりは、我邦における人絹は、より多く發展している。これもまた認識不足であつたが、商工業の進展は内外の予想を裏切つている。ただ精密工業が如何であるか、憂患をもって迎える人があるけれども、昨年商工奨励館で開かれた発明品展覧会に、大阪で製造された沢山のリミット・ゲージを見て、予は大に喜んだ。このゲージを旨く使用して、ミリメートルの千分一程度まで規格通り

部分品を作ることが実行せらるれば、これを集結して精密な機械となすはあえて困難な事業ではない。かくの如きゲージが大阪で製造せらるるは、精密機械製造の前提であるから、その工程に入るのはただ時の問題であることを確認した。

これより以上に予が確認し得るは、大阪で商と工とを学んだ人が、将来日本商工業のトップを切ることである。これ等の人は無論大阪に同化せらるる。しかしこれ等が他市に移ればまたこれを同化する。工、商をもつて繁栄に趨く都市は、小大阪の如き観を呈する。結局日本国中至るところに大阪の支部であるような都市が出現して、国家の富強を鳴らすのであろう。

敵を知り己を知らば百戦殆あやうからずとは、孫子の金言である。商戦も亦然しかり。工戦も然しかり。謹みて大阪市民の猛省を促すのである。

(昭和九年(一九三四)一月五日「大阪毎日新聞」所載)

- 長岡半太郎著『随筆』（改造社、一九三六年十一月）所収。
- PDF化するにあたり、旧漢字は新漢字に、旧仮名遣いは新仮名遣いに改めた。
- 読みやすさのために、適宜振り仮名をつけた。
- PDF化には $\text{L}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X}_{2\epsilon}$ でタイプセッティングを行い、 $\text{dvi}2\text{pdf}^{\text{m}}\text{x}$ を使用した。

科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」

<http://www.cam.hi-ho.ne.jp/munehiro/sciencelib.html>

「科学図書館」に新しく収録した文献の案内、その他「科学図書館」に関する意見などは、「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehiroumeda/bbs>

を御覧いただくか、書き込みください。